書評

異なり記念日

齋藤陽道【著】

評者
酒井邦嘉
東京大学大学院総合文化研究科相関基礎科学系

なぜ思い出が薄かったのか

著者の齋藤陽道さんは写真家であり，ろう者である。ただし聴者の環境で育ち，日本手話を本格的に使い始めたのは16歳からだ。それまで補聴器を付けて日本語の発音訓練を受けたが，他人の声は9割方わからず，「ひとり空回りする会話しかできなかった時期の思い出は，とても薄い」と言う。ところが20歳を過ぎて補聴器と訣別し，手話が馴染んでからは，「ことばを取り戻していくうちに，自分のものとして瑞々しく思い出せる記憶が増えてきた」。そして，「今ならわかる。思い出すことができなかった理由は，こころと密接に結びついたことばを持っていなかったからだった。ぼくはことばの貧困に陥っていた」と述懐している。

私はそこに「こころ」の一部としての「ことば」の本質を見る。それと同時に，補聴器や人工内耳などの医療器具が人間の尊厳を奪いうるという事実に愕然とする。

異なったままでつながるために

陽道さんのパートナーである真奈美さんは，デフファミリー，つまり家族が皆ろう者という家庭で育ったから，母語は日本手話である。もちろん夢も手話で見る。その2人から生まれた樹さんは，ろう者を両親に持つ聴者であり，日本手話と日本語のバイリンガルでもあるコーダ（Coda；Children of Deaf Adultsの略）なのだ。この異なる「ことば」と体験を持った3人の生活から自然と溢れてくる会話を通して，陽道さんは笑い，怖れ，そして本当に大切なことに気づかされる。陽道さんは次のように記している。

「『異なり』は，勝ち負けを決めたり，同一化を求めるためにあるのではない。異なりの溝はそのままに，そこを超えて交わろうとするところから，知恵や覚悟が生まれる」

一言語によるコミュニケーションがグローバル化だと勘違いされる現代にあって，互いの「ことば」と「こころ」の多様性を認め合うことがいかに大切であることか。病を持つ者に対して，その人を見守りケアする者も（本書はシリーズ「ケアをひらく」の一冊だ），同一化を求める治療だけでは不十分なのである。

まなざしもまた「声」である

聴者は声が聞こえるから，常に相手の目を見ながら話す必要がなく，目を合わせずに話をする人も多い。ところが手話は見ていないと伝わらないから，ろう者は相手と目を合わせて手話をするのが基本であり，視線をそらせば，その視線の方向が指示対象を意味することになる。手話ではまさに「目は口ほどにものを言う」のであり，表情もまた非手指動作として文法要素になっているのだ。さらに陽道さんは，「ぼく自身が写真を通して，まなざしも『声』のひとつだということを学んだからかもしれない」と述べている。

本書に綴られたことばは，とても美しい。「自然は常に何かが豊かに流動している。ただ行われる奇跡のような何かを，いつも潤沢にこぼしている」という何気ない一節に心が洗われる。全体として随想というより詩の連作に近く，それ故，抒情的で温もりのある写真と静かに響き合う。魂を揺さぶられるアート作品だと私は感じた。

A5判・頁240
2018年7月
定価：本体2,000円＋税
［ISBN978-4-260-03629-3］
医学書院刊

©IGAKU-SHOIN Ltd, 2019

閲覧情報：酒井 邦嘉 2019/02/05 12:08:05